



歴史研究のための覚書

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-03-08 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 土井, 洋一 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00003541

《論説》

歴史研究のための覚書

土 井 洋 一

1. 二つの書物との対話
2. 病人史の視点と方法から学ぶ
3. 教育社会史の視点と方法から学ぶ
4. 四つのインパクト
5. 雑学の旅
6. 人物論は目的か手段か
7. 主役と脇役の織成す図柄

はじめに

本稿は、前号（『社会問題研究』第39巻第1号、1989.10.31）に掲載された拙文『社会福祉実践史研究の現段階』の趣旨を補うために、研究の課題と方法にかかわって私がこれまで『社会福祉実践史研究』（同研究会機関誌）に書いた幾つかの短文を一部修正し、改めて編集し直したものである。

1. 二つの書物との対話

最近読んだもののなかで、二つの書物がとくに印象に残っている。一つは、川上武『現代日本病人史—病人処遇の変遷—』（勁草書房、1982）であり、もう一つは中内敏夫『新しい教育史—制度史から社会史への試み—』（新評論、1987）である。しばらく前に刊行され、既に多くの読者を得ているであろう前者と、ばりばりの新刊でしかもこれまでの仕事を止揚すべく、大胆な課題提起をしている後者を併記するのは必ずしも適切ではないかもしれない。医学領域に全くの素人が、たまたまそのサブタイトルに魅せられて前者を手にしてみたのであって、後者を取り上げる取り上げかたと同じではないからである。

しかし、私たちの手探りの実践史研究にとって、先行研究の泉は、経済学、

法学、社会学といった比較的がっしりした骨格を持つオーソドックスな社会諸科学の中よりも、この二つの人間科学の中により豊かにわき出ているかもしれないのである。「豊かに」という表現には、思索し行動しつつ苦悩し、なお創りあげようとする常に少数派の研究主体の生きかたまでが含まれる。

そこで、以下、この二つの書物を紹介しながら、そこから学ぶものを明確にしてみたいと思う。

2. 病人史の視点と方法から学ぶ

川上武という至極精力的な医学者の名前を知らない人は、一般市民でもあまりいないのではあるまいか。常に社会的な角度から患者の側に立って医療システムを解剖し説得的批判を展開する氏の一貫した研究態度から、二冊の歴史研究の大著が生まれた。本書は『現代日本医療史』（勁草書房、1965）に続く、この分野での開拓的研究の成果である。

「序章 病人史の方法論—病人処遇の変遷—」は、A5版で106頁あり、ここを読みこなすだけでも大変である。構成は「一 病人史と疾病史、二 病人史の対象、三 病人史の史料・文献、四 病人史の構造、五 現代病人史の時期区分、六 病人史の視角」の六分節であるが、四、五に大部分が割かれ（7～90頁、うち四だけで47頁分）、他は極めて単純明快に通りすぎていて、多くの歴史研究書とはいささか趣を異にする。

氏によれば、疾病史ばかりで病人史の蓄積がないのは、病人の側、いわば医療の外側から医学史、医療史¹⁾を見直す契機が、近年の市民運動の影響でようやく緒についたばかりだからである。「病人を集団として把握し、それに社会科学的方法のアプローチをすることで」真髓がある病人史は、「“労働者階級状態史”と同じ発想の上に立つ」という。つまり、副題の意味は「いかに処遇されたか」なのである。病人の置かれた社会的状態（狭くは処遇）を対象にすれば、当然「差別の実態と歴史的変遷を明らかに」せざるを得ないが、この点での氏の問題意識は、六の「視角」のところで整理されているように、鮮烈にして明快である。「何のために」といった初歩的論議からいまだ脱却しきれていない我々の

(注)

1) 例えば、宮本忍『医学思想史』（全3巻）勁草書房、1971年、参照。

基本的弱点は、しばしば研究のための研究、方法のための方法“あそび”となって顕在化する。氏などからしたら、「全く粹狂にも程がある」ということになる。

次に史料論へ話を移そう。ここは、たったの3頁、「決定的なマイナス」状況はわかるが、何としても軽い。ここで氏が挙げる医師の立場からの当該文献・資料は、①呉秀三『精神病者私宅監置』、②石原修『女工と結核』、③丸山博の乳児死亡の仕事、に過ぎない。むしろ、氏の研究対象論からすれば『職工事情』、『日本之下層社会』、『女工哀史』等の社会科学的文献・資料が重視され、「病人の状態が部分的に明らかにされているところに教えられることが多いのが実情」だという。ということは、課題追求的な涉猟あるのみ、ということになる²⁾。さらに、戦前、病人自らが書いた文献・資料が少ないなかで、闘病経験のある作家などの作品に注目している。例えば、序章五でも石川啄木（『全集第六巻 日記II』筑摩書房、1978）が取り上げられている。

四の「構造」について、要点を手短に掴み出すことは容易ではないが、病人を規制している四つの条件、すなわち(1)医療技術の進歩と疾病構造、(2)医療制度、医療保障、医療教育等の医療システムの問題、(3)資本主義発達の段階のもつ影響、(4)社会の人権意識の水準、家庭・社会からの差別・排除の問題、の「速度と進歩の質」の違いによって、多様で跛行した現実態が生まれるという。その際、特に第四の条件を重要視してその位置関係を究明することが、氏の構造論の視点となる。

五の「時期区分」では、「大きくは戦前・戦後に分けることが合理的」だとしているが、その論拠は必ずしも説得的ではない。感染症時代、成人病時代という二つの区分が、それぞれ戦前、戦後に対応するとしても、先の構造論とのか

2) かつて見田宗介は、『価値意識の理論』（弘文堂、1966年）の「序論」の中で、既存の学問体系の一つの方法を新たな幾つもの問題にあてはめて整理しようとする「方法適用」型の研究スタイルと、一つの問題を解明するために多くの方法を動員する「問題追求」型の研究スタイルを対比したことがある。それぞれの長・短を述べながら後者に立つ場合（見田の研究態度もそうである）の「ディレクティブイズムのわな」についての指摘が、今でも印象に残っている。

かわりがよくわからない。個別史の業績が少ないことも理由の一つに挙げられているから、まず大掴みに区分してみても資料・文献にブルドーザーをかけてみるということかもしれない。

この著書の主題は、あくまでも医療技術の持つ明確な専門性を前提としたその批判的展開にあるのであるが、批判の対象に据えようにもその方法技術すらいまだ定まっていない我々の研究分野にあっては、こうはいかない。「いかに処遇されたか」の人権視点を欠落させずに、「いかに処遇したか」の史的考察を続けざるを得まい。その際、実践者の「聖化」から我々が免れる一つの方法は、「処遇された側の眼」から学び続けることである。

本書は、この至極平明な道理を読者に教えてくれている。ともあれ、相手かまわず善意と正義を振りまわす主観主義ほど迷惑なものはないのである。

3. 教育社会史の視点と方法から学ぶ

中内敏夫の著書は、フランスのアナール派を中心とする社会史研究の水準を踏まえ、教育史研究の行き詰まりを打開しようとする“問題提起”書である。ヨーロッパの歴史理論への考察が全編を貫いているから、別の言い方をすれば難解な理論書と言うべきである。

本書の構成は、「序 教育の社会史の構造、I 成立、II 性格、III 方途」であるが、各章節は、既出、初出の十論文より成り立っている。フランス語はおろか、ヨーロッパの研究事情に疎い私は、これまで氏の著書・論文の多くに接し、ノートを作り、ささやかなコミュニケーション（私の拙文を送る、暖かく厳しいコメントを受ける）を保ってきた甘えから本書を読み始めたが、内容に恐れをなし、I、IIをとばして序とIIIを初めに読んだ。なかなか面白いので次に最初から読み進み、さらにもう一度読みながらノートを作ってみた。やはり、何としても難しい本である。先に挙げた理由の他に、氏独特の長い、ニュアンスを込めた言いまわしや、造語、さらに既存の言葉や概念の使い直し（氏は、いちいちその内容に触れ、定義づけをそこでしてはいるのだが）、重複が多くつながりの悪い全体構成（これは全編書き下しでないから止むを得ない）等にも拠っている。本書の全体に及ぶ詳細な紹介は、私の能力をはるかに越えているが、またそんな作業は有益でもないであろう。読みたい人は、読んでみれ

ばよいのだから。

そこで、以下、我々が手探りの歴史研究を進めていく上で、少なくともこの本を精読した私を感じとり捉えたかぎりでの示唆を、四点に整理してみたいと思う。

4. 四つのインパクト

第一は、歴史と理論の関係について。書き出しに、本書は教育史の書物ではなく「教育史の歴史理論についての考察書である」とある。扱う対象は、①教育の歴史の研究と叙述の方法はどうあるべきであり、②どのようなものが史料に値するものか、の二点だとする。教育史学には理論書がない。その理由はやはり二つある。①日本史学、西洋史学の応用部門であって、固有の理論などというものは存在し得ない。②実証性にとって有害無益である。

この二つの考え方の批判、克服に向けても著者のエネルギーは割かれているが、厳密に言うとその作業はあくまでも副次的である。特に、②について言えば、「無理論の実証主義」に潜入している歴史観、教育観の存在をかきわけの氏の感性は鋭く、実証でひけをとらずに「実証主義」を論破することは比較的たやすいと考えるからである。①については、批判などしている余裕は無く、「応用部門」だなどと言われては心外、という怒りを込めた氏の確信が相対的に固有の対象、固有の視点の再検討に向わせる³⁾。

「教育のしごとを人々の心身の管理のひとつのかたち」と見る立場からすれば、「教育と教育的発達の歴史は（中略）その管理と制度と意図の歴史で」ある。しかし「その多くは匿名の、この歴史を生きてきた人びとの立場からみれば、管理者の制度と意図のなかで、あるいはこれをこえて生きてきたものの生き方

3) 中内のこの考え方は、すでに『近代日本教育思想史』（国土社、1973）の中に鮮明に打ち出されている。私達の研究会は、現在16名構成である。大多数は福祉プロパーの若い研究者であり、歴史学に限って言うと、学部で専攻した者が2名居るだけで大学院まで通して学んだ者は皆無である。中内のような、我国を代表する第一級の教育史学者と私達とを比較すべくもないが、後発の学問が自立していく過程でどうしても避けて通れない苦しみとの表現としてそこを受けとめることは、少なくとも、現在の私にとって大きな意味を持つ。

とその意図の歴史で」あるから、この「匿名の」教育史こそが、著者の求めるものにならざるを得ない。キー概念は「産育」（産み、育てる意）となる。その際の、「固有の方法」についてはどうであろうか。氏は、方法を無手勝流に編み出すことはできないと考える。対象に向かい、それを分析するための道具は、社会諸科学の長い間の試行錯誤と論争を経て淘汰される。市民権を得た、ないしは得つつある道具は堂々と使い、付加価値を与えて変形するもよい。少なくとも「固有」性において、対象や対象に向かう視点ほど「方法」にこだわってはいない、私はそう理解した。史的人口動態論（モノグラフィ）に内在する方法への氏の着目なども、その点の例証となる。

第二は、このような新鮮な著書をまとめさせるに至った、氏の問題意識について。「教育の概念のつくり直し」に迫られた氏は、「教育社会史の領域」を人間固有の文化とのかかわりで成立する第二領域の他に、ベーシックに、動物とその質を共有する第一領域を設定し、その「境界領域」を主たる研究領域にするための精密な論拠を提示している。それは何故か。

現代は、「文化の違った使い方のために、人類の生存そのものの危機が教育にもあらわれてきた段階」だからである。私は、17頁のこのセンテンスを最初に読んだ時からよく覚えている。社会史ブームの原因の一端も、この辺にあるのではないだろうか。生活様式＝文化と自然（死、性、世代交代）とのからみ合いへの執心……。宗教者は終末論でくくり、祈り、祈りを奨める。氏は、学者・研究者としての自己限定から、自己保身と無縁のところ課題を導き出している。「危機は、危機の由来するところを正確に認識しおえたとき、すでになかば以上解決されているのである」（107頁）とは、何とも言いようのない名言である。

第三は、「学際的」ということについて。「学際的とは、すでにでき上っているひとつの、もしくは複数の方法論に依拠して出発しながら、究極的にはこれをぬけ出てもうひとつの、単一の方法に到達することなのだ」という（233頁）。天文学と物理学の学際から、実際に一つの学問研究ジャンルが創出されたという話を聞いたことがあるが、そういう意味なのであろう。

それはともかく、私は、我々の研究領域の諸先輩が、政策科学、実践科学、応用科学、学際の学、問題提起の学等々と並べ立てて、一向にそれらの用語の

意味を確定しないことに戸惑ってきた。氏によれば、「学際の学」は「問題提起の学」であっても、「応用の学」ではないのである。「基礎」を共有することのない「応用」は、乱立、いや時には敵意を内にはらむカオス状況すら生むものである。

第四は、「比較」ということ⁴⁾について。この本を読んで「比較」と「紹介」の違いについて、深く考えさせられた。往々にして学者には、若い世代は別にして、自国の研究課題を放り出して外国事情の紹介でハクをつけたがる類がいる。層も厚く専門分化していて、最初から外国研究部門に所属して研究を続けている人々は、勿論この類には当たらない。共同研究を通して分業と協業の課題が出てくるだけである。これまで、日本の生活綴り方教育を中心とするユニークな労作を量産してきた氏が、何故にフランス社会史に向かったか、浅学の私にもそのわけがよくわかった。

5. 雑学の旅

先の二つの書物に留まらず、「対話」とは聞こえが良いが、実は雑学の旅の途上で出会った多くの書物がある。歴史の勉強を始めてみると、歴史学から裾野を広げてきた人々と違って専門外から珍入してきた者の弱点であろうが、わからない問題に直面して立ち止まることが多い。困ったことに、そこでまた雑学をしてしまうから時には收拾がつかなくなる。そもそも雑学なるものは、いかに課題追求的、禁欲的な経過を踏もうとも、無秩序で興味本位の散策といった気分を内にはらんでいるから、連想が連想を呼んで思考が拡散される。一点に収斂していくための地道な本業の思考過程があつてこそ、雑学の意義も高まるというものであろう。歴史研究の場面においても、DIVERGENCEとCONVERGENCEの相互関連の質が問われてくる。これを「広がりと深まりのダイナミズム」と言い換えてみても良いかもしれない。そこを踏まえてさえいれば、ある時期、どちらかに偏っても良いのではあるまいか。

4) 中村元は、「比較する」とは、共通の問題をピンで留めて見取り図をつくるようなもの、「あるいは、共通の分母を取り出して座標軸を設定するといつてもいい」と述べている（『思想をどうとらえるか—比較思想の道標—』21～26頁 東京書籍、1980）。

今の私には「これではどうしようもない」という気持ちから発する渴望感のようなものがある。もっともこのことは、社会事業史全般の研究への義務感とはあまり関係がない。そうした義務感から解放されることを目指し、しかも自己自身が責任をもって新たに義務づける課題を確定するためにこそ、先の二つの書物を持ち出していると言ってもよい。もっとも、「後悔先に立たず」というから、社会福祉の世界で歴史研究が厄介者扱いを受け、物知り顔で過去を摘み食いしても通る「常識の非常識」には、これから静かに向きあって生きていくつもりではある。

私達の歴史研究にも、随分沢山の課題が出てきた。格好よく言えば、未開の荒野を切り開こうというのであるから、決りきった対象を決りきった方法で処理していればよい人々の安定感はない。雑学の旅の疲れを癒しながら、多くの論点の中でも繰り返し論議されてきたものの一つ、歴史叙述における人物の描き方の問題に焦点を当てて若干の考察を加えてみたいと思う。

6. 人物論は目的か手段か

私達の研究会は、そのタイトルが示すように絶対に人物論を避けては通れない。無論、過去現在の人物好きばかりが集まっているから、人物論ばかりやってきたぐらいのもので、その方法論議のほうがはるかに重要なのではあるが。ただ私には、叙述能力を棚上げして言わせてもらえば、人物は素材であり手段であっても、目的ではないように思われてならない。その根拠をうまく言えないのだが、どうも二つに整理できるのではないかと思うようになった。一つは、最近、色川大吉教授の『歴史の方法』（大和書房、1977）を再読していて教えられた。作家と歴史家の違いを「目的の違い」から説明する氏は、大岡昇平『歴史小説の諸問題』の「現代の歴史家にとって（中略）人間は多くの場合、社会的条件の結果として記述される。ところが人間の内部は、小説家にとって最も自由に腕を揮うことができる領域である」という一節を引きながら、個性の偶然性の支配する分野により強い関心を向ける作家と違って、「歴史家は、個性の偶然性はそのまま認めて残しながらも、その人間の個性の他の一部分を、その時代の矛盾の凝縮された一局面として据えようとする。つまり、歴史家は人間の個性に内在する歴史的なものに、より大きな関心を寄せるのである。さらに

歴史家が特定の個人より、ある集団の行動への意思や動機の研究を重視したがるのは、そこにより歴史的、より客観的なものが見出せる可能性を感じるからである」と述べている。もっともひと一倍負けん気が強そうで、溺れるほどの文才に恵まれた氏は、歴史小説家、例えば司馬遼太郎の誤った越権を厳しく論難したりしている。実際に、両者のあいだは整然と区分されているわけではなく、著しく接近しあったり、相互乗り入れ（歴史家が歴史小説を書く稀な例として、奈良本辰也のことが紹介されている）が行なわれたりするが、だからこそ改めてそうした整理区分の必要性が生まれてくる。要はそこで、整理区分の根拠が、組み立てられた論理構成を通してどれだけの説得力を持つか、であろう。

このことは、何故整理区分が必要なのかという問いと深い関係がある。氏によれば、歴史小説の洪水は多数の読者、その回路をはるかに超えたテレビ、映画の視聴者への影響力を通して、国民の歴史観を規定する。歴史の真実を伝えるもう一方の働きが、狭い学問ギルドの範囲内に閉塞されていたのでは、国民のあいだで嘘と真実の見境がつかなくなる。学者はもっと啓蒙家になれ、というより、目的に規定され、学問上の手続き（方法論）を厳守しながら、より大きな読者層に深く訴え得る表現方法を文学的表現とのからみで鍛えていくべきなのではないか、氏はそう言いたいのだろうと私は読んだ。この表現方法の問題については、次に紹介する氏の硬、軟二つの著書を読み比べられたい。

氏には、北村透谷、美那子夫妻と宿命的と言ってもよい関係にあった自由民権運動家で医師の、平野友輔という人物を克明に追求した作品『明治人—その青春群像』（筑摩書房、1978）がある。東洋的大人の風格を備えたこの「非凡な凡人」の生涯は、「そのまま一篇の優しい長い詩にたとえられる」（〈追記〉221頁）が、氏には伝記を書く気持ちは全く無かったという。「私にとって“平野友輔”とは思想史上のひとつのシンボルにすぎず、目的は（中略）日本の民衆意識の総合的な研究（引用者注、『新編明治精神史』中央公論社参照、1973）にあった」とあとがきにあるように、この本のタイトルは先の「ある集団の行動への意思や動機の研究」に通じている。具体的な人物を通してその歴史的働きや、明治発展の原動力の構造化の過程を描きだそうとする際の、氏の方法的課題は、明治人に「共通な心理（メンタリティ）」というカテゴリーの解明である。つま

り、「全力をあげてとりくんだ歴史体験の共有感情」（7頁）解明の方法論を媒介項にして、素材（人物）は、目的意識に裏づけられた作業仮設から慎重に選択される⁵⁾。そして、一連の帰納法の実証の過程を踏んだ結果として、課題の達成度ははかられる他はないのである。

色川教授の一連の著作は、私達の課題限定的な人物研究が“人物にはじまって人物に終わる”ものなのかどうかという問いかけに、有力なヒントを与えてくれた。

7. 主役と脇役の織成す図柄

さて、話を二つ目の根拠の方に移してみよう。過日の吉田久一先生を囲む会⁶⁾は、私にとって久しぶりにのびやかに過ごせた楽しいひとときであった。先生のお人柄もあるし、リベラルでデモクラティックな先生が、掛け値なしに気質にまで血肉化されているのを昔から知っているつもりなので、安心してのびのびしたわけである。その先生の前半の一言に、研究者の端くれとして、私はこだわっている。

「石井十次が孤児院をやった、留岡幸助が不良少年とかかわった」ことをはずして、この二人が社会福祉実践史上に位置づくことはない。そこでは光田健輔（医療）、坂本龍之輔（教育）のように関連する主役もおれば、井上友一（官僚）、内村鑑三（思想家）のように主要な脇役もいる。主役と脇役は歴然と区別されなければならないし、脇役は、主役を徹頭徹尾掘下げる過程で初めて、あ

5) この点では、例えば安丸良夫『出口なお』（朝日新聞社、1977）が参考になる。出口なおという特定の個人への執着を通して、その底を流れる安丸の「方法的視座」から多くを教えられた。

6) 1988年5月29日、東京の高輪プリンスホテルにおいて、先生の「社会福祉実践史研究に寄せて」と題する報告をいただき、活発な討論を展開する機会を得た。その中で「危機状況になると、真っ先に研究者、理論家が逃げてしまい、現場が丸裸で置き去りにされる。困ったことに、実践現場の側は情報も少なく知恵もまわらず、悪戦苦闘しているうちに気がつくとり返しにつかない事態になってしまっている。過去に何度もそういうことがありました。」淡淡と語る先生の表情が私にはとても印象深かった。

る主要な位置を与えられるのではないだろうか。

さらにつきつめてみれば、主役、脇役（無論、有名無名は関係がない）の織りなす交渉関連の図柄を、私達は一体何のために創り、何のために使おうというのだろうか。個々の人生と思想、それらを集約した時代精神のようなものの解明のためであろうか。それは、社会福祉の名を冠する、冠しないにかかわらず、思想史研究の目的ではあり得ても実践（思想）史研究の直接の目的ではない。むしろそれは、そこから何を学ぶかが問われてくるような、間接的研究領域であるように思われる。

文脈に即した限りでの好例を挙げてみよう。私は、これまでに、岡山県下からさらに瀬戸内海を渡り、愛媛県下を歩いてきた。城戸幡太郎先生の生家である松山の旅館「きどや」が、フランス料理店「ピストロ」と名を変えても、文豪、漱石のお陰で少なくとも外観は原型をとどめているのが何とも嬉しいし、明治11年から伊勢時雄が活躍した今治教会の建物も美しい。その勇姿からは、かつての凄じいまでのキリスト教弾圧のかけらも思い浮かばない程である。横井、徳富両家を中心に家系図を辿ってみると、この熊本の一族の壮観さが浮び上がってくる。同志社大学人文科学研究所編の『熊本バンド研究』を発展させた杉井六郎教授の名著『明治期キリスト教の研究』や、中野好夫の傑作『蘆花徳富健次郎』などは、この一族がいかに明治という激動の時代の典型たり得ているかを教えてくれる。しかし、この一族もまた、久布白落美のような小数の例外を除くと、私達の研究にとっては主要な脇役なのである。ものごとを整理する時には、細部に問題が出ることを恐れず敢えて断言してみることが必要である。「そうではない」という反論を予定し、反論の中身次第では次に言うことが変わるの、弁証法の常識に属する。そう言えば、かつて、あまりにも明快にものごとを整理し過ぎて、しかも現場人の感情的反発に近い反論の正しさを封じたが故に歴史上大きな過ちを犯したのは、家庭学校史の主役の一人、留岡清男であった⁷⁰。

話を本筋に戻そう。実践史上の主役達は、とくに明治中期の産業革命以降にあっては、政府、官僚制度は勿論、先行する深刻な社会問題の一端をそれぞれに己が肩に背負い、よろよろとした足どりで歩き続けた。それぞれの伝記も書かれているだろうし、今と違ってスケールの大きい魅力的な人々も沢山いたに

違いない。しかし、彼らはそうした個人的努力の限界をいやという程思い知らされ、それでもなお逃げ出すずるさを持ち合わせず、捨て石になる覚悟をしていったのではなかったか。彼らは一体何の捨て石になろうとしたか。強く自覚していたかどうかはともかく、同行の志の質、量両面での確保、そのための専門教育システム、救済のための国家の制度の確立であったと思う。勿論、当時の国家相手では歩が悪しい、留岡幸助がはまりこんだように功罪相半ばする危険性を宿しながら、それでもなおそうであったに違いない。個々の人生、思想を彼らの内側から辿りながら、感じ入ったりしていたのでは科学的々々以前に、第一彼らに対して失礼であろう。いずれにせよ、私達の課題限定的な研究会は、対象史(貧困史)、政策史、思想史等の諸研究成果に学びながら、思想家色川教授の場合と異なる研究方法上のカテゴリーを、近い将来“人物”と切り離して確立していく課題があるように思う。小さな蜂すらまだ越えられないでいる私が、これ以上能弁になることは出来ない。大作であろうと小品であろうと、作品を通して議論し合うのが基本だからである。ただ、私自身よくわからず回答を出せないでいた問題に、少しは考えが及んだつもりになっている。

-
- 7) 教育史上、いわゆる「後期生活教育論争」と呼ばれる城戸、留岡ら、教育科学研究会を指導する教育学者と東北を中心とする生活綴り方教師たちとの論争は広く知られている。その歴史的な解釈は、今日に至るまでさまざまな角度からなされてきた。(「生活教育座談会」稲垣忠彦編集・解説『教育学説の系譜』所収、国土社、1972、参照。)